

The Innocents Abroad における

Mark Twain の Humanism

有 川 昭 二

(一)

Life on the Mississippi においてミシシッピ河流域を、Roughing It において極西部、カリフォルニア、更にハワイ諸島を描いた Mark Twain は、次にやはり同じ若さと好奇心に駆りたてられてヨーロッパと小アジアを旅行し、The Innocents Abroad を表わした¹⁾。しかし同じ若さと好奇心といっても、Mark Twain のその時どきの気持には微妙な差異があった。Life on the Mississippi では野心に燃えた西部の子がミシシッピ河のパイロットとして着実な第一歩をふみだした自信があふれ（その第二部はそれから20年して成功した文学者として再び河を訪れた記録であるが、その中核をなしているものはやはり自分の青年時代に対する愛惜の念である）、Roughing It では Gold Rush の悪夢につかれて鉱山フロンティアを狂奔する焦燥と駆け出しの新聞記者の苦悩が見られるが、The Innocents Abroad には聖地巡礼の観光旅行団にそれを企画した新聞社の通信員として加わった自由な気安さがある。そしてこの気安さが人間観察の漫遊旅行を続ける Mark Twain の humanism に、一種闊達自在の趣を与えている。

Mark Twain の若さにみちた好奇心は、結局は「偏見や狭量な心を打ち破るには旅が一番よく、特にアメリカ人にはこの事が要求されるし、世事万端についての広く、健全な考えは、生涯地球の片隅にひっこんでいては決して得られるものではない²⁾」という確信に結実するものであった。実際に旅してみて、「人間性は世界中どこでもあまり変わらない³⁾」と考えることはあっても、廃墟、遺跡、古都などに接して触発される、遠く、重い時間感覚や、湖や川など単なる地形上の比較を通じてすら、母国アメリカが如何なる地位にあるかを実感するのはきわめて貴重なことであった。Mark Twain 自身はその Preface の中で、この本は pleasure trip の、picnic の記録であると謙遜しながらも、その目的は初めて海外旅行に出かけたものが、先輩の眼に頼らず、自分独自の眼で旅行したらどうなるかを示すにあるとし、自分としては「公平に」見たつもりであるし、それを上手、下手は

別としても、少なくとも「正直に」書いたつもりであると云っている。Mark Twain の謙遜は学術探険書に対するものであるが、いずれにしろその「公平さ」と「正直さ」には心を打たれる。

(二)

「単調で」「人の心をひきつけない」「荒涼とした」Palestine の地にあつて、喉の乾きや疲労などこの上もない苦しみをなめながら、云わば聖書に導かれるようにしてあちこち歩き回る Mark Twain の情熱は並み大抵のものではない。そしてこの情熱は Mark Twain が Bethlehem の近くで、岩の間を出入りしている灰色のトカゲを見て抱く奇怪な、虚無的な幻想——いかに富み栄えた場所といえども、結局はこのトカゲの住処^{すみか}となってしまう——に裏打ちされて、ますます強いものとなっている。つまり虚無の深淵の上になつた Mark Twain の、Holy Land というかつての聖書の舞台への打ち込み方が、ひたぶるに何かを求める姿として、じかに迫ってくるのである。しかしそこには奇妙にも、いわゆる宗教的感動は少なく、結局 Mark Twain が求めるものは、歴史家、地理学者、或いは考古学者が求めるような、学問上の真理ではないかと思われるほどである。⁴⁾

宗教的法悦と Mark Twain の宗教的信念の伺えるところが、それぞれ一か所ずつある。前者は、一行——信念深い連中と、Mark Twain のような“sinners”と合わせて8名——が子供の頃から教えこまれ、その絵を見せられて来た Jerusalem の町を初めて見た時、感激のあまり言葉もなく、涙も忘れて立ちつくす場面である。涙が出なかった事について Mark Twain は、偉大な歴史によってかもし出される聖地 Jerusalem の詩情、崇高さ、なかんずくその威厳が、涙というような女々しいものとは無縁であったからだと説明している。もっともこの法悦自体が、個人的な苦悩とか不幸とは無縁の、何か主知的な感じのするものではあるが。後者は Mark Twain が小アジアの古都 Smyrna と Ephesus に関する黙示録の予言——死に至るまで患災であれ。そうすればいのちの冠を与えよう。…Rev. 2:10——をとりあ

げ、本来は「教会」の問題を「都市」までひろげて解釈する⁵⁾予言学者や巡礼たちの愚を批判したところである。天上の永生を約束する“a crown of life”は、教会（信仰心）にこそ与えられるものであって、興亡をくりかえす世俗の物質的欲望とは関係がないという主旨である。

この二つはしかし書物全体の中では点として働くのみであって、線として、つまり書物の undertone として働くほどに成長するものではない。他に宗教的と云えるところは、Mark Twain が Holy Sepulcher——キリストがはりつけにされ、埋葬された——で、何かを無理に納得するように敬虔になる場面と、ミラノの司教 St. Borromeo の義挙——生涯、貧民と病人の救済に奔走した——について述べているところぐらいである。

Mark Twain はイタリー各地の寺院や、Holy Land のどこに行っても、何よりもまず人間的な事柄に関心を寄せている。例えば、キリストのガリラヤ伝導の中心地であった Capernaum を訪れて、キリストに関して次のように述べている点はどうであろうか。

イエスの兄弟達がイエスに向かって、「どうか一緒に家に帰ってくれ。母さんと妹たちはお前が家に寄りつかないので、ひどく悲しんでいる。お前が帰ってくれば、小おどりして喜ぶだろう」と云ったかどうか考える人が居るだろうか？ イエスの妹たちのことを少しでも考えた人が居るだろうか？——しかしイエスには姉妹があったのだ。彼女たちのことをイエスは、見知らぬ連中から虐待されている時にしばしば考えたにちがいない。住む家もなく、人の子には枕するところもないと云った時、又総べての人から、ペテロからさえ見棄てられ、ただ独り敵の中に残された時、ひそかに彼女たちのことを思ったにちがいない。⁶⁾

このようなキリストの見方の、何と人間的なことであろうか。

さまよえるユダヤ人についても同様である。キリストのはりつけの刑が行なわれた朝、自分の家に休息を求めては入って来たキリストを追出出して永遠に呪われた存在となったユダヤ人、永遠にさまよい歩いて、休息も死も得られないユダヤ人について

彼の表情はいつも変らない——年をとってひからび、眼はくぼみ、ただ誰かを、恐らくは若い頃の友達の誰かを探し求める時だけいくぶん輝くが、かねては無頓着にくすんでいる。その友達ももう今はあらかた死んでしまっているのに……彼はいつも淋しそうに古い通りを歩いて行って、あちこちの壁に十字の印をつけ、古びた建物になつかしそうな、又気のなさそうな視線をそそぐ。そして昔の自分の家の敷居にたって少しば

7)
かり涙をこぼす。それは苦い、苦い涙なのである。

母国アメリカの西部の、青年の夢破れた男の面影すら宿すこの Wandering Jew の姿、人間の最も痛切な感情である「悔恨」の化身に、Mark Twain は深い同情を寄せている。

「永遠の都」である Damascus で Mark Twain の注意をひくのは、1861年のトルコ人による 5,000人のキリスト教徒の虐殺と、恐ろしい形相を見せるレブラ患者であり、Magdala のそれは、貧しく、悲惨な住民の生活である。

Dead Sea から Mars Saba に至る間は、木も草もない、峻しい峡谷続きで、かつてヨハネが説教した“Wilderness”である。照りつける太陽にへとへとになって、Mark Twain の一行は Mars Saba のゴツゴツした懸崖に建てられた、カトリックの修道院にたどりつく。Mars Saba の住民というのは、そこに住む70人ぐらいの修道僧なのである。一行はそこで、外国人でプロテスタントであるにもかかわらず丁寧なもてなしを受ける。Mark Twain はそれに感激し（それまでカトリックに対しては何かにつけ敵意を抱いていたのだが）、総じて Palestine のカトリックの修道院について

修道院の門はいつも開いている。ボロをまとってしようと、紫衣を着けていようと、心の立派な人なら誰でも歓迎される。修道院は貧しいものにとっては、この上もなく有難い神の恵みである。巡礼者はプロテスタントであれ、カトリック教徒であれ、金はなくてもパレスチナの野をくまなく旅することが出来る。そして不毛の荒野においても、修道院に行けば立派な食事と、清潔なベッドがいつも供される。身分のいい巡礼者たちは、よく日射病や熱病に冒される。そんな場合の救護場所が修道院である。このような場所がなければ、パレスチナの札巡の旅は、体の頑健な人でなければ出来ないものとなろう。我々一行はパレスチナの修道院の教父たちのために、その健康と繁栄と長生のた⁸⁾めにいつでも、喜んで乾盃する用意がある。

ここにあるのも、宗教的というよりはむしろ倫理的な匂いのする文章である。

宗教的な雰囲気や妨げるものとして、更に冷静な realist としての Mark Twain の存在がある。いよいよ Holy Land には入り、キリストがペテロに天国への鍵を与えた場所に立っても、Mark Twain には神の実感が湧いて来ない。

かつて救世主が実際にその足で歩いた土地に立っているのは、我々にはとても奇妙なことに思える。そのような事は神の性質である、ある漠としたもの、神秘

性、靈性といったものと矛盾するように思えるからである。私にはまだ自分がかつて神が立っていた場所にすわり、その神が眺めた川や山を眺め、自分を取り巻いている顔の黒ずんだ男女が、かつてその神を見、見知らない者にはいつもそうしたように面と向かってぞんざいな口をきいた者たちの子孫であるのが理解出来ない。私にはこの事がどうしても理解出来ない。私の考えていた神は、いつもはるかな雲の中にかくれていた⁹⁾のだから。

ガリラヤ湖は星明りの夜だけ壮大な drama の舞台となる。白日の光にさらけ出された真昼のガリラヤ湖はあまりにも卑小であり、“Holy Land”としての美しいイメージと釣り合わない。

Nazareth の受胎告知の Grotto (小洞窟)に立って、かつて天使が進み出たという壁がんを見ても、その空間を埋める何物も想像し得ない。遠く離れていたときにはあれほどありありと見ることの出来た影深い天使の翼や Virgin Mary の頭にさしかけた光が完全に消えてしまっている。

又この Grotto——聖家族に関係のある人物たちが、Nazareth や Bethlehem や Ephesus で住んでいたという——も、考えてみればおかしな話である。その当時の住民は Grotto に住むことを考えつかなかったのか。或いは住民は住んでいたとしても、どうして聖家族が住んでいたものだけ残っているのか。又重大事件が皆 Grotto でおこっているのも不思議だ。どんなに堅固な家でもいつかは倒れる。しかし天然石で出来た Grotto は永遠になが持ちする。どうもこの Grotto というのはペテンくさい。単なる記念物としてなら、これらを建てたカトリック教徒に感謝しなければなるまい。

“Fountain of the Virgin”の周りに Nazareth の少女たちが集まっていて、一行の中の「熱狂者」が一人を指さして、すらっとして上品で、“Madonna”のように美しいと感嘆する。Mark Twain は背がひくく、ぶきょうで、いくぶん騒々しい少女しか認めることは出来ない。Virgin Mary が美しかったからといって、今の Nazareth の女が皆美しいと思う義理はないのだ。

St. Veronica——キリストが刑場に行く途中、その顔の汗を拭いてやると、そのハンカチにキリストの顔が印された——の住居では、有名なハンカチをパリーやスペインやイタリーの寺院で見た（中にはいくら金を出しても見られないのもあった）のを思い出す。

Bethlehem のキリスト生誕の地で、実際にその場所に指を触れてみても、湧いてくる思いは何もない。乞食やちんばや修道士に取り囲まれて、喜捨を求められては、「黙想」どころではない。

ローマでは信者が祭壇の前で示す信心の度合いは次のような順序である。1.聖母マリヤ 2.神 3.ペテロ 4.10数人の聖者に列せられた法皇や殉教者 5.イエス・キリスト（しかし腕に抱かれたみどり児として）

（三）

少年が青年になり、大人になる、つまり人間として成長していく過程は、ある意味では幻滅を味わうということであろう。The Innocents Abroad では又幻滅の記が目立ち、Mark Twain の人間のあり方に、弱々しいながらも、ある種の光を投げかけている。

Palestine は偉大な歴史にみちているが故に、Mark Twain は漠然とアメリカ合衆国と同じ位の広さがあるものと思っていた。日曜学校で聖書の“all these kings”が眼にふれる度に、それらは英国やフランスやスペインやドイツなどの王と同じなのだろうと思っていた。だが現実の Palestine は狭小で、王といっても、インディアンのように貧相であるのが分かった。Joshua が Israel に持ち帰ったという巨大なぶどうの房も見当らず、アラビア人となって、馬と一緒に砂漠の生活を送ろうと思っていた夢も、あまりにも無知な、ひどい馬の取り扱い方を目のあたりにして、一瞬にして消え果て、「美しい雌のアラビヤ馬にのって、風のように駆けて行く、猛々しく自由な砂漠の子」も、現実には気狂いじみた Bedouin に過ぎないのが分かった。Jerusalem は歩いて一時間でその周囲をまわることが出来、ヨルダン川もガリラヤ湖も死海もとほうもなく小さかった。

Mark Twain は他人から聖書にのっていると教えられて、小川の傍で泥がめが歌うのを根気よく待っていた若い Jack——旅行団の中の Mark Twain と同じ“sinners”の一人——の話を、面白おかしく述べている。Jack はかねては使用する日除けの傘もささないで、日に焼かれ、汗みずくになって、小さな丸木の上で甲らをほしているかめが、歌を歌い出すのを待っている。1時間待っても駄目で、更に10分ほど待つ。その10分が切れる頃、かめはやおら頭をもたげ、それからそれを少し下げ、一寸つぶった眼を今にも歌を歌おうとするかのように大きく見開いたが、そのまま木のこぶに頭をつけて、眠り込んでしまった。Jack はいかさま師のかめに腹をたて、土くれを投げて追い払おうとするが、丁度その現場を皆に見つかって、とめられる。Jack はしかし¹⁰⁾すぐ氣をとり直し、“It is no matter.”とつぶやく。この Jack の姿は、Palestine で色々な幻滅を感じる Mark Twain の姿を連想させる。結局 Mark Twain は、Palestin が詩と伝説にささげられた dream-land であ

り、過去の幻影であり、自分がよつて立つこの現実の世界のものではないのを知る。そして Jackが “It is no matter.” と云って、かめと訣別したように、 Holy Landと訣別するのである。

(四)

Mark TwainはHoly Sepulcherの Greek Chapel 内にある、人類の父アダムの墓の前で号泣する。

アダムの墓！家から、友達から、そして身うちの者から遠くへだたった、知る人とならないこの土地で、このようにして血族の墓を見つけだすとは何と感動的なことか。なるほど遠い間柄ではあるが、親戚にはちがいないのだ。あやまつことのない本能がそれを教えてくれる。子としての情愛が根底から揺り動かされ、湧きたつような感情が私をひたす。私は傍の柱により¹¹⁾かかり、わっと泣き出してしまった。

勿論ユーモアであるが、ここに Mark Twain の humanism の立場が明瞭にあらわれている。つまり神から見放され、樂園を追放された Adam を父と仰ぎ、父がこうむった損失が、子たる人間の永遠の利益 (our eternal gain) であるとする立場である。Mark Twain は後年 The Diary of Adam and Eve を発表してこの立場を言明し、具体化しているが、いずれにしる聖地巡礼が目的の旅で、肝心かなめの聖地での感動が一向に盛り上がらないところに、このユーモアが放つ風刺は痛烈である。

宗教をはなれた自由な立場で、Mark Twain の humanism はどのように発揮されているであろうか。

先ず人間に対する興味がある。Mark Twain は丁度パリーで開催されていた万国博覧会を2時間ぐらいで切り上げ——その間も出品された「生命のない物」より、群集を見ている方が面白かった—— Napoleon IIIとトルコ王 Abdul Aziz による閱兵式を見に行く。そして次のような観察をくだす。

最も進歩した、最も洗練された近代文明の代表であるナポレオン三世と、生れつきに加えて、そのように育てられたせいもあるが、不潔で、野蛮で、無知で、保守的で、迷信深い国民、更にそれを支える三本の柱が専制と搾取と血である政府の代表であるアブダル・アジズ。ここ輝けるパリーで、壮麗な凱旋門の下で、¹²⁾一世紀と十九世紀とがにこやかに挨拶をかわす！

更に Yalta で、旅行団全員がロシア皇帝から謁見をたまわった時、皇帝や王女や王弟に対して、国民性や政治権力や政治情勢をふまえた上での、性格解剖に及ぶ細かい観察をくだしている。

そしてその対象は王侯貴族だけとは限らない。トルコ政府の重税に苦しむシリア人、エルサレムの不衛生きわる住民たち、パリーと違って、貧富が同じ地区に同居しているナポリの貧民たち、或いはフロレンスの大聖堂で群がり集まってくる乞食たちと、その眼は虐げられた者たちにもくまなく注がれている。観光地としては見るべきものの何もない、イタリヤの一寒村 Civita Vecchia でも、人間に対する Mark Twain の関心は

住民たちは、顔も風采も衣服も、大へん汚れている。彼等は誰かが清潔なシャツをつけているのを見ると、軽蔑の眼を投げかける。女たちは村の洗濯場で半日は洗濯する。しかしそれは恐らく他人の洗濯物なのかもしれないし、或いは又、洗濯用と身につけるものとは別々のものなのかもしれない。何故なら彼女たちは今洗濯したばかりのものを身につけることなど、決していないからである。洗濯が終ると、彼女たちは横町に腰¹³⁾をおろして子供をあやす。

その上、Mark Twain は単に現に動き回っている人間ばかりでなく、例えば地下牢をみても、必ずそこに人間として悩み、苦しんだ囚人の姿を描き出す。牢獄の記事はマルセイユ沖の Castle d' If, パリーの Bastille, 及びヴェニス Bridge of Sighs とあるが、そのうちのイフ島に関するもので

わずかに光の差し込む独房に、ある囚人は27年間、全然人間の顔を見ないで住んでいた。不潔なみじめさの中で、ただひとり胸中に去来する色々な思いを友として、しかもその思いは悲しみに満ち、何等の実現される望みもないものであった。……この男は部屋の壁の床から天井まで、あらゆる姿をした人間や動物の絵を、こみ入った図案でまとめて彫りつけていた。彼はその自から課した仕事に、くる年もくる年も苦勞して従事したのである。永い間——それは幼児が少年になり、元氣盛んな青年となり、大学生活をぶらぶらと過ごし、職を得て成人し、結婚し、そして自分の幼年時代を何か漠とした、大昔の事としてかえりみるほどの永さである。しかしこの囚人にはそれがどれほどの永い、永い幾時代かに思われたか、一体誰が教えることが出来たろう。世間の男には、時間が矢のように飛び去ることもあった。しかしこの男には決してそのような事はなく、時間は常にのろのろ這うばかりであった。一方にはダンスに過ごした夜は何分かにしか思われず、他方には土牢の毎夜全く同じ夜が、何分か或いは何時間かどころか、のろのろと歩みおそい何週間¹⁴⁾かに思われたのだ。

囚人に対するこのような理解、共感を、humanism

と名づけないで何と云うことが出来よう。ここに一介の観光旅行者を超える **Mark Twain** の、「人間」に対する真面目な態度が見られる。この真面目さから **Pompeii** の遺跡を見ても、そこに当時の住民の生活を生き生きと想像し、ある土牢に鎖でつながれた二人の囚人の、迫り来る溶岩の恐怖に身もだえした様子を思い浮かべるのである。これは又、いかにも **Mark Twain** らしいユーモアのある、そして新聞記者らしい才能を見せるものとは云え、ローマの **Colosseum** と **Constantinople** の女奴隷売買についての新聞記事についても同じである。読者を意識しての、微に入り細をうがつ作家的想像力もさることながら、先ずその根底にある **Mark Twain** の **humanism** を見のがしてはなるまい。廢墟と化している闘技場で偶然 **Mark Twain** が拾ったというローマ時代の新聞記事の一節は

Parthia 人の捕虜の剣闘士は勇敢に、よく闘った。それも当然の事で、そこには彼の生命と自由がこめられていたのである。彼の妻や子供たちも見物していて、その愛情で彼を奮いたたせ、勝利を得れば再び自分のものとなる昔の家の事を彼に思い出させた。彼の二人目の相手が倒れると、妻は子供たちをしかと胸に抱きよせて、嬉し泣きに泣いた。しかしそれはほんの束の間の幸せにすぎなかった。彼は妻の方へよろよろとよろけた。妻は夫がかち得た自由が遅きに失したのを知った。彼も相手から致命傷の深傷を負っていたのである。¹⁵⁾

あらゆる場所に人間を見る **Mark Twain** のこの態度は、又 **Capuchin Convent** (骸骨寺) の修道士たちの奇妙な、満ちたりた虚栄心——自分の骨が飾られる場所に非常な関心を示す——の理解や、**Père la Chaise** (フランスの国立墓地) のアベラルとエロイズの墓を訪れての、アベラルの非難——その晩年は同情すべき点があったにしても、ならず者に過ぎなかった——となって表われている。

最後に **Mark Twain** の死に対する態度に触れねばならない。**Mark Twain** は「死」のもつ **the solemnity, the grandeur, the awful majesty** を深く感じとっていた。人間に対する **realistic** な関心は又、人間の「死」に対する関心でもあり、そこから「死」及び上記 **Père la Chaise** のような墓地に関する多くの記事が生まれてくる。「死」に対する **Mark Twain** の真面目な態度は、その **humanism** を一層光り輝くものとしている。一例として、モルグ街にある身許不明の死体収容所の訪問記の一部：

我々は格子窓の前に立ち、中を覗き込んだ。そこに

は一面に死人の衣類が下げてあった。ずぶ濡れの、地の粗い仕事着や、女子供たちの着る薄い、手の込んだ衣服や、血痕のついた、貴族の着るような洋服や、押しつぶされ、血まみれになった帽子などがあった。傾いた石の上に、裸で、水ぶくれした、紫色に変色した溺死体が置かれ、人力では開けることの出来ないような死の力で、折れたかん木の一片を握りしめていた。その力こそ、どうしようもなく暗い運命から逃れようとした最後の、絶望的なあがきを、無言のうちに教えるものではあったが。一筋の水が恐ろしいその顔の上を間断なくちょろちょろ流れていた。……我々は物思いに沈み込み、そして40年ばかり前、その恐るべき死体の母親、我が子を膝に抱き、それにキスを与え、誇らかな気持で通行人に示した母親の胸に、このような恐るべき結末の予想が一体ちらついていたことがあったろうかと思った。我々がそこに立っている間にも、ひょっとして死人の母親や妻や兄弟が来るのではないかと¹⁶⁾ 私はあやぶんでいたのだが、そのような事はなかった

(五)

The Innocents Abroad における **Mark Twain** の **humanism** を考える場合に、次の二点は忘れてはならない事のように思われる。

- (1) 端的且つ闊達自在なその信念の吐露は、西部を知り、**American Democracy** を体得していた **Mark Twain** にして初めて出来た事である。**Irving** にしろ、**Hawthorne** にしろ、これほどに旧世界に対立出来る世界をもつことはできなかった。云わば自国の自然と政治に対する愛着が、純一無雑なその **humanism** を可能にしたといえる。
- (2) 人間肯定のこの **humanism** が晩年の **pessimism** とどのように結びつくか。つまり **The Innocents Abroad** は **Mark Twain** の生涯において一つの頂点を示すものか、或いは一段階をなすものか。ここにはただ問題点を示すだけにとどめたい。

註

- 1) これら三作の実際の発表年月日とは逆に、ここではその内容に従ってのべた。
- 2) **Mark Twain : The Innocents Abroad, Vol. II** (Harper and Row), p. 407
- 3) **Ibid, Vol. I, p. 236**
- 4) **Mark Twain** と聖書の問題は一つの大きな問題のようであり、他日稿をあらためて考究したい。
- 5) **The Innocents Abroad, Vol. II, pp. 123—126**

- 6) Ibid, p. 231
- 7) Ibid, p. 321
- 8) Ibid, p. 349
- 9) Ibid, p. 198
- 10) Ibid, pp. 217—219
- 11) Ibid, p. 307
- 12) Ibid, Vol. I, p.120
- 13) Ibid, p. 271
- 14) Ibid, p. 95
- 15) Ibid, p. 294
- 16) Ibid, p. 127